



とうかい

第 24 号

公立学校
共済組合 東海中央病院

◆基本理念◆

「最高の誠意」「最善の医療」

◆基本方針◆

- (1) 患者さま尊重の医療
- (2) 診療機能の向上
- (3) 健全経営の維持

「糖尿病とメタボリックシンドローム」

内科 竹内 美征

有病者数740万人 予備軍を含めると1620万人

→つまり20歳以上の国民の6人に1人という割合

失明をきたす原因疾患の第1位 (年間4000人)

透析導入をきたす原因疾患の第1位 (年間13000人)

年間医療費 1兆1700億円

これは悪性腫瘍全体の医療費の約50%、また心臓疾患の医療費とほぼ同額に当たる



これらの驚くべき数字は全て糖尿病に関するものですが、現在の日本において糖尿病がいかに社会的に莫大な影響を与えているかがお分かりいただけるかと思えます。

糖尿病がこれだけ急速に増えてきたのは、ご存知のように戦後の生活習慣の欧米化に伴う飽食・運動不足が最大の要因ですが、糖尿病という疾患自体の性質も影響しています。糖尿病という疾患は当初は自覚症状が出にくく、基本的に治らない疾患であり、また治療に際し食事や運動といった日々の生活上の制限が要求されるという側面を持っているため、中には継続的な治療や自己管理を怠り、様々な合併症を併発して苦しんでいる方々も多く、結果として医療費も年々ふくらんでいる、というのが現状です。

また先日、政府のほうからメタボリックシンドロームについての報告がありました。簡単に説明しますと、肥満、糖尿病、高血圧、高脂血症といった生活習慣病がある場合、それぞれは軽症であっても複数合併することにより脳梗塞や心筋梗塞など動脈硬化性疾患になる危険性がより増える、という内容で、つまりは軽症であっても厳重な管理をしないといずれ生命に危険が及ぶ状況になるという警告でした。特に糖尿病に関して言いますと、糖尿病の段階のみならず糖尿病になる前の境界型の段階において、すでに動脈硬化が始まっていることが最近の研究でわかってきて、このことは専門学的には「インスリン抵抗性」という状態が主な原因であると考えられています。メタボリックシンドロームやインスリン抵抗性については診断基準があり、空腹時採血、腹囲測定、血圧測定によって簡単に判断できるため、健診などで異常の指摘を受けた事がある方や、生活習慣が乱れている方、さらには体重管理に苦慮されている方など心当たりのある方はぜひ一度外来受診されることをお勧めいたします。

では治療法はといいますと、やはり自己管理の継続と薬物治療になりますが、薬物治療については、新薬の開発が進み各疾患の管理は以前と比べ随分できるようになってきました。特に糖尿病に関しましては近年、内服薬、インスリン注射薬ともに多くの新しい薬剤が発売され、患者さんそれぞれの状態に合わせて薬物を組み合わせる治療が盛んに行われております。今後できるだけ健康で楽しく長生きしたいとお考えの方は、今からでも遅くありませんので是非一度病院に足を運び、現在の状態のチェックをうけ、必要な対処をすすめて下さい。そしてとにかく自己判断で治療を中断しないようにしてください。

皆さんの今後の御活躍を期待しています。

当院に増設導入されたデジタル・マンモグラフィ装置

放射線科 長尾 康則

我が国における乳がんの罹患率は増加の一途をたどり、地域のがん登録から年齢調整をするとその罹患率は第一位であり、壮年層（30～64歳）の部位別がん死亡率では乳がんが最も高く、2003年には9805人も女性が犠牲になっています。その半数は30～50歳代の女性でした。

これを減少させるためには、早期発見・早期診断・早期治療がなによりも大切ですが、そのために医療機関では視触診・超音波検査・マンモグラフィ検診などによる乳がん検診を行っています。マンモグラフィ装置とは、画像診断を行うための乳線・乳房用のレントゲン撮影装置のことで、マンマ（mamma＝乳房）グラフィ（graphy＝レントゲン撮影）からの造語です。乳がんが8人に1人といわれるアメリカでは受診率が67%にも達している一般的な検査法で、乳がんの早期発見に役だっています。厚生労働省の指針によれば40～49歳までは二方向（左右で4枚）、50歳以上は一方向（左右で2枚）の撮影が義務づけられています。

さて、当院では各務原市から乳がん検診の要請を受けて、平成16年度にマンモグラフィ併用による検診を行いました。これにより約1200名の受診者のうち5名の方が乳がんと診断されました。17年度には約700名が受診されて4名の方に乳がんが発見されています。マンモグラフィによる乳がん検診は視触診と併せて2年に1度の受診が望ましいとされているため、本年度は16年度に受診された方を含めて1200名以上の検診を予定しています。

この検診に使われるマンモグラフィ装置には、画像データの違いにより、アナログ式とデジタル式がありますが、従来からのアナログ式では撮影から画像確認まで約15分の時間がかかり、撮影した画像の処理・保管にも問題があります。そのために当院では、最新鋭のフラットパネル・ディテクター搭載型デジタル・マンモグラフィを新たに増設導入しました。これにより、撮影から画像確認までの時間短縮（約5分）が可能になり、デジタルの利点を活かしたモニター診断も容易になり、視認精度の向上も期待できます。また、画像のファイリング（DVD保管）も簡便になり、過去の画像との比較などでも優れた能力をもっています。本装置の増設導入により当院では受診される方の負担軽減と受診希望者を多くお引き受けて

きる準備が整いましたので、より多くの方に乳がん検診を受けていただきたいと思います。
なお、マンモグラフィは痛いという話を聞かれた方もいらっしゃるのではと思いますが、これには時期や個人差などもありますので放射線科で一度お尋ね下さい。



ところで、インターネットや雑誌あるいは病院などで、ピンク・リボン（右図）を見かけられると思いますが、これは乳がんの早期発見・早期診断・早期治療の重要性を訴える世界共通のシンボルマークです。乳がん検診を受けようというピンク・リボン運動は、あなたとあなたのご家族の笑顔を守るためにあるのです。



子宮頸がんを予防しよう

臨床検査科 荻山 源

『子宮頸がん』 この言葉を聞いて、自分は健康だから大丈夫！とか、自分はならないだろうと思っていませんか？

近年、子宮頸部の病気は子宮がん検診の普及や生活習慣の変化により、発症年齢の若年化とともに前がん病変の増加傾向がみられます。

子宮頸がんは女性特有のがんでは乳がんに次いで多く発症し、主な原因としてHPV（ヒトパピローマウイルス）の感染が深く関与しています。しかし、このHPVの感染は女性にとって一般的で、70～80%の女性が一生のうち少なくとも一度は感染すると言われていいます。主に性行為により感染し、多くは無症状で、ほとんどが自然に消退します。しかし、一部のHPV感染が長期間続いた場合、子宮頸がんが発症すると言われていいます。海外ではこのHPVに対するワクチンが開発されており、近い将来、日本でも子宮頸がんの予防を目的としたワクチンが普及し、身近なものになると思われます。

一般的にがん検診は、がんの予防と早期発見を目的としています。子宮頸がん検診の他にも、子宮体がん検診、肺がん検診、胃がん検診、乳がん検診など色々な検診が行われていま

す。

これらの検診で積極的に利用されているのが細胞診検査です。

この細胞診検査とはどんな検査でしょうか？

私たちの身体は約 1 兆個の細胞が集まってできており、これらの細胞が病むことで病気になります。細胞診検査とは、身体の色々な所から細胞を採取し、その細胞一つ一つの形や性質を詳しく調べ、がんなどの悪性の病気やウイルス感染症などの一部を診断する検査を言います。

そしてこの検査は、検体採取が短時間で簡単にでき、受ける人の苦痛も少なく、一度に大勢の人の検査ができます。集団検診やスクリーニング検査（異常のある人をピックアップする為の検査）に大変有効で、子宮がん検診の子宮頸部・子宮体部擦過細胞診や肺がん検診の喀痰細胞診などに用いられています。当院においても、細胞診検査を積極的に活用しており、より迅速に結果を出したり、精度を高めるために、3名の細胞検査士（臨床検査技師で日本臨床細胞学会認定の有資格者）で検査を行っています。

最近では、病気に関する正しい知識を広げ、検診受診率を向上させるために、オレンジクローバーやピンクリボンといった様々なキャンペーンが盛んに行われています。

オレンジクローバーキャンペーンとは、子宮頸がん予防のために、検診を受けることの重要性を伝える活動です。

子宮頸がんは他のがんとは異なり、原因が解明され、定期的に検診を受けていれば防ぐことができます。がんでも早期に治療すれば完治可能な病気なのです。

検診を受けなかったために、防げるはずのがんになってしまう…、そうならないためにも、市町村や職場での検診を定期的に受けることをお勧めします。



看護師・助産師・保健師・准看護師を随時募集しております。

詳しくは以下の連絡先（看護部）までご連絡ください。



◎初診・再診受付時間▶ 8:30～11:30

◎毎週土・日曜日祭日全科休診



保険証等の提示

月に一度は保険証・医療証等を保険証提示窓口
に提示してください。



とうかい

発行：〒504-8601 各務原市蘇原東島町 4 丁目 6 番地 2
公立学校共済組合 東海中央病院
電話 (058) 382-3101 / FAX (058) 382-1762
URL <http://www.tokaihp.jp>

発行人：病院長 伊藤 勝基

発行：年 4 回